

Rituals that Bind, (2)Panel Discussion: Waking up Your Family, (3)Making Marriage Last, (4)Keeping the Stoke Busy, (5)Panel Discussion: Keeping Love Alive の5つのセッションから構成された。筆者が参加したのは4ヶ国の人口研究者からなる初日の第3セッションと2日目の第4セッションで、報告者は共通であったため、やや重複気味の感があった。

報告者は、Peter McDonald（オーストラリア国立大学教授）、阿藤誠（日本）、Bhassorn Limanonda（タイ：チュラロンコン大学教授）、Yap Mui Teng（シンガポール：政策研究所主任研究官）の4名で、McDonald教授は先進国の出生率と家族政策について全般的な報告を、他の三名はそれぞれ、日本、タイ、シンガポールの出生率の動向と政策的な対応についての報告を行い、それに対する質疑が行われた（日本についての報告タイトルはLowest-low Fertility in Japan: Causes, Policy Responses and Value System）。

シンガポールの合計特殊出生率は1986年にいったん底を打った後、強力な出生政策によって2年間のみ大きく回復した。しかし、その後再び緩やかに低下を続けてきたが、2001年の1.6から急落して2003年には1.25を記録し、再び政策強化に取り組みつつある。この会議もそのような政策的取り組みの一環であり、会議とは別にシンガポール政府社会開発・青年・スポーツ省の担当官と4人の人口研究者との懇談の機会があり、シンガポールの出生促進策に対するアドバイスを求められた。シンガポール政府は子育ての経済支援、仕事と家庭の両立支援などに力を入れており、この面での一層の政策強化（例えば育児休業の長期化、保育サービスの充実）が求められるであろう。しかしながら、日本と同様アジアNIES（4ヶ国・地域）の出生率がここ数年で軒並み「超少子化状況」に陥った事実、またヨーロッパ諸国の中では南欧諸国・東欧諸国が同じ状況に陥っている事実をみると、伝統的家族観あるいは伝統的男女観（パートナー関係に対する親子関係の優位、固定的性別役割分業観）の根強さを超少子化状況の共通因子として認識せざるを得ない。したがって、これらの国が超少子化状況を克服するためには、従来の家族政策メニューの強化だけでは不十分であり、個人の自立と尊重、男女平等に向けた価値観の大転換が不可欠ではないかとあらためて感じさせられた。（阿藤 誠記）

## 韓国における出生力低下と政策的対応に関する資料収集

厚生労働科学研究費による研究事業「韓国・台湾・シンガポール等における少子化と少子化対策に関する比較研究」の一環として、12月6日～10日にかけて韓国に滞在し、資料収集と専門家との面談を行った。面談した専門家は、全廣熙忠南大学校社会科学大学教授、김형식統計庁専門官、趙南勲保健社会研究院招聘研究委員、李三植保健社会研究院研究員、장혜경女性開発院研究部長、金斗燮漢陽大学校社会科学大学教授、殷棋洙ソウル大学校国際大学院助教授らである。いずれも韓国の出生力低下と関連する社会・政治・経済・文化的変動についての高度に専門的な意見を聴取でき、また調査データ・論文・報告書を含む貴重な資料を収集できた点で成果があった。（鈴木 透記）

## アジア中東学会連合（AFMA）第5回大会

東アジア地域各国の中東学会の連合体であるアジア中東学会連合（Asian Federation of the Middle East Studies）の第5回大会が「中東、アジア、イスラーム」をテーマとして、第13回韓国中東学会大会開催に合わせ、2004年10月15日（金）～17日（日）に韓国釜山広域市の釜山外国語大学で開催された。組織委員長はAFMA会長兼韓国中東学会会長のCHEON Wan Kyung 韓国外国語

大学教授で、実際の運営は同大学地中海研究所が中心となって行われた。参加者リストが配られなかったため、正確な参加者数はわからないが、プログラムから見る限り、ラウンドテーブル、8つのパネルとその前後の2つのセッションで報告者数が60人を超え、ほぼ同数の討論者がいたので、100人を超えていたことは確かであろう。日本人報告者は10名おり、筆者も Panel 5 (Islam, Society and Culture) で “Demographic Analysis of Muslims in Japan” と題された報告を行った。他に人口に間接的に関係する報告は若干あったが、直接的に関係するものはなかった。なお、今回大会から日本・韓国・中国の中東学会に加えてモンゴル中東学会も初めて参加したこともあるためか、次回大会はモンゴルで開催される可能性が強いとのことであった。

(小島 宏記)